Japanese Working Class Artist ～ RYO KANZYU

短い物語P&D

また逢う日まで

ORIGINAL
SINGLE

また逢う日まで（１／１）

憧れだけで手に入れたアコースティックギター。

思い込みで描いていた理想の見た目を意識しながら、僕はとりあえず必要なものを揃えた。

けれど、かなり前からフライングしていた勢いは疲労していた。

思うような音を出すことは、僕にはできそうにないと分かった。

まともに弦を押さえることができず、弾いたといえる日すら無かった。

左手を意識すれば右手が惚けて、手元の景色ですら遠い彼方。

練習する度に気持ちが錆び付くようで、結局、正味数年という戯れになった。

その間、ギターは何も言わずに付き合ってくれた。

諦めてから数日、思いつきで表面にペイントを施した。

その出来映えに満足する日が、しばらくの間続いた。

諦めておきながらケースにしまうこともできず、部屋の片隅に押しやることもできないギター。

リビングの目立つ位置にありながら、寂しそうにしている。

ある日、僕は決めた。

ギターを知人の手に委ねる事にした。

天命をまっとうしてもらうため、ネットオークションに出品した。

僕は全て知人に任せた。

高額なタイプではなかったから、損得の勘定はしなかった。

落札までの動向は一度も覗くことはなかった。

僕は僅かな後ろめたさを胸の奥でくしゃっと丸めた。

出品から数週間後、ギターは無事に落札された。

新たな持ち主は男性で、音楽を職業としていた。

シンガーソングライターという肩書きが眩しい同世代。

僕より少し若いGOOD LOOKING。

アラフォーには見えなかった。

いわゆるメジャーに浮かんでいる存在ではなかったけれど、彼の曲を聴いてみたくなった。

ネット上を少し徘徊し、いくつかの動画を探し当てた。

試聴可能な曲のいくつかは、僕が好むメロディだった。

流行りの音の中には見つけにくくなった染み残るメロディ。

僕はそんなのを求めていたから嬉しくなった。

それから数週間が経ち、僕は彼のLIVEに行くことを決めた。

上手い具合にタイミングが合い、そこへ集中できる一日が用意できた。

少しだけ予習をして、自分なりに最低限の準備をしてから出かけた。

場所は地元の小さなLIVEハウスだった。

会場には思ったよりも人が集まっていた。

物販のテントには列が出来ていた。

キャパ１００人に満たない空間を揺るがす人数。

少しだけ心配になってしまう賑わいだった。

予約して手に入れていた整理番号は１８だったけれど、入場まで思った以上の時間を要した。

蒸し暑い待ち時間が少しだけ苛立たせた。

涼しい風が近くを通ってくれた時は、お一人様の僕だけは笑顔だったかもしれない。

出入口でドリンクを手に取り、ようやく屋内に進んだ。

カップに入ったビールを気にしながら、僕が選んだ席は最後列の真ん中辺り。

LIVEは開演時間に遅れることなく静かに始まった。

ここへ来て良かった。

途中から、そう思った。

やはり曲が良かった。

好みのメロディが多かった。

自分が好きになった曲が、自分にとって良い曲。

自分が感じた名曲。

歌詞は後からついてくると思う。

LIVEの終盤、手離したギターにも出番があった。

それも嬉しかった。

MCから伝わる彼の人柄は、僕にとってストレス微少だった。

世界に存在する全ての音楽を聴けないまま死ぬのだから、この場所は僕にとって意味がある。

渦巻く思考と聴こえる音楽が、いつものように混ざり合った。

あっという間に最後の曲。

演奏されたのは十数曲くらい。

二十曲には満たなかったと思う。

もっと聴きたいという欲求が、僕には生まれていた。

待たせることなくアンコールに応えた彼は、歌う前に言った。

「次の曲が最後になります。このギターと出逢って生まれました。今日が初披露です」

僕が手放したギターが、その曲の着想源だという。

その曲だけが、プラグレスの演奏だった。

僕を動揺させた新曲。

心臓の鼓動が変速。

瞬きは忘れていた。

その歌詞に綴られていたのは、身に覚えのある出来事だった。

一致するいくつかの景色。

それらが想い出になる前の描写。

一番が終わり、短い間奏。

その間、僕は考え続けた。

答えが見つからないまま二番が始まる。

過去をなぞる筆圧は少しずつ強くなり、ある記憶にまでたどり着いた。

スタンドに背を預けている弦を外したギター。

未完成の詩を書いたノート。

そのページを破り取って丸め、ギターのホールを狙って投げた日。

忘れていたのか、思い出さなくなっていただけなのか。

LIVEは終演を迎えた。

僕は拍手で目が覚めたかのように我に返った。

挨拶を終えた彼はステージの右そでへ。

右手を振り、頭を下げた。

次は左へ移動して行く。

その時だった。

見覚えのある後ろ姿を見つけた。

最前列の右寄りの席。

来ていたんだ。

ひとり席を立つ女性。

久しぶりに見る姿。

僕はその背中を見送った。

座ったまま、見えなくなるまで。

そこにはもう、動揺する僕はいなかった。

偶然に出逢った四葉のクローバーは、摘み取らないほうがいい。

僕は今、あのギターに再び逢う日を待っている。　～終わり

作品データ

【作話】

■タイトル(Title)：短い物語P&D『また逢う日まで』

■作家名(Artist)：環樹涼(RYO KANZYU)

■制作年：2013

※物語はブクログのパブーにて電子書籍として配信しています。Kindle・Koboからも配信中！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

【画】

■タイトル(Title)：『また逢う日まで』

■作家名(Artist)：環樹涼(RYO KANZYU)

■制作年：2013

■画材：ボールペン、鉛筆、画用紙、スプレー

■作品サイズ：B5サイズ相当の画用紙を使用。縦19cm×横14cmの枠内に描画。

■販売価格：10,000円（税込）

※『短い物語P&D』を表す絵画は、主にリアル展示による公開です。